敦賀の墓碑（二）

小林　敏

草摺佐右衛門墓

昔から庶民の楽しみといえば、芝居や浄瑠璃などの芸能と相撲などがあった。

とりわけ相撲は武術の一つとしても用いられ、また、人気の力士は大名のお抱え力士にもなったりして、江戸時代には大いに発展し、大阪、京都、江戸では本場所も開かれた。

また、各地方を巡業し、興行したその土地に有望力士がいれば育てあげ、本場所へも出場させたりして、地方との結びつきも強かった。

敦賀も商港として栄え、人々の往来も多く、港で荷役をつとめる仲仕も大勢が住み、賑やかであった。

祭りがあるときには、力自慢たちが参加して相撲を奉納したり、ときには広場などで石を持ち上げて力を競いあった。

金ヶ崎町愛宕神社には、日本相撲の草分けともいえる野見宿彌と当麻蹶速の相撲図が奉納されており、相撲には関心も深かった。

敦賀と上方とは商業を通じて密接な関係にあり、なかでも京都とは地理的にも近く、物資の往来にとどまらず、文化、芸能、医学、芸術など学芸の交流も多かった。

ただ相撲については地元出身力士や、巡業などもあったことと推察されるが、今日ではそれらを証する資料も少なく、わずかに次の文書と墓石が残されている。

それは「朝嵐常右衛門相撲場所拝借願書案」（岩谷末雄文書「敦賀市史　史料篇」）で、この文書によれば、文政元年に天神社境内で勧進相撲を興行していたところ、力士と遊女とが「かけ落ち」するという事件が起こった。

かけ落ちした二人は各地を転々として、最後には但馬（兵庫県）へ逃げ落ちたが、これを追っていた敦賀の朝嵐常右衛門と、出石の勇取長蔵とが協力して、この事件を無事に解決することができた。

この事件を契機として、京都の頭取である草摺佐右衛門から朝嵐常右衛門へ敦賀一国の頭取免許が授けられた。

しかし、この事件以後、境内での興行が難しくなり、浜地での興行願いを役所へ差し出しているのが、この文書の大略である。

かけ落ち事件が発生すると、常右衛門は直ちに佐右衛門と連絡をとり、さらに出石の勇取長蔵が協力したことである。

これには草摺佐右衛門の強い影響力があったものと推察されるが、この佐右衛門の墓石が敦賀に残されている。

川崎町　観光ホテル前

（正面）

天保三壬辰年五月立之

草　摺　墓

俗名

佐右エ門

とあり、他には何も刻まれていない。

佐右衛門の墓石はかつては京都にも建てられていたが、すでに無縁墓となって整理された。

京都市中京区裏寺町六角上ル　誓願寺

（正面）

最誉勝空草摺居士

（右面）

草摺佐右衛門高弟

御幸野政右衛門

（背面）

文政十二歳

丁丑正月六日

佐右衛門の墓石を建立した御幸野政右衛門は、佐右衛門の門弟であり、初め佐吉の名で、後には政右衛門と改めて頭取になっている。

京都相撲の草摺一門の頭取は

初代　草摺岩右衛門（安永二年～天明七年）

（岩之助）

二代　草摺権右衛門（文化九年～同十二年）

（登名川権右衛門）

三代　草摺佐右衛門（文化十四年～文政十二年）

（勇山佐吉）

四代　草摺末吉　（嘉永五年～慶応四年）

（若勇末吉）

と四代つづいている。

初代岩右衛門は宝暦より草摺岩之助の名で京都番付に見え、安永二年六月に頭取に昇進し、天明二年六月に岩右衛門と改名、天明七年九月二十九日に没した。横綱小野川喜三郎が京都相撲のときの師匠であったことは広く知られている。

三代目草摺佐右衛門は、初め勇山佐吉の名で中相撲で活躍、寛政二年九月上相撲に昇り、文化七年七月に引退、同九年には頭取に昇進した。同十四年七月三代目草摺の名跡を継ぎ佐右衛門と改名、文政十二年正月六日に没した。

三代目は初代岩右衛門の弟子であり、天明年間には京都番付に名が見えている。また、誓願寺に三代目草摺佐右衛門の墓石を建立した御幸野政右衛門の師匠である。一方、敦賀の朝嵐常右衛門については全く手がかりはなく唯一、常右衛門が建てた墓石が残されている。

松島町　来迎寺野

（正面）

釈　順超

（右面）

俗名　朝嵐仁右衛門

（左面）

門人　朝嵐常右衛門建之

文政六癸未年三月日

これは常右衛門が先代仁右衛門の墓石を建たてたのであろうが、前述の「相撲場所拝借願書案」を役所へ差し出したのは文政五年であり、すでにこの頃には朝嵐の名跡を継ぎ、頭取として一門を率いていたのであろう。

敦賀においていつ頃から相撲が発展し、相撲部屋や、その組織などについても全く明らかでない。

しかし、「近江伊香郡志（下巻）」に「力士余呉の湖は伊香郡唐川村の産なり。姓は野瀬氏、庄兵衛はその通称なり。（中略）はじめ越前敦賀の力士某の弟子となり、各地に相撲の技を闘わす。享和三年十月本所廻向院内の勧進大相撲のとき、強敵に対し連勝大に名声を挙ぐ。（後略）」とある。

この頃には敦賀においても、近郷近在の有望力士を探し、育てあげる相撲郎屋が存在していた。

余呉の湖が「敦賀の力士某の弟子となり」は朝嵐か、または別の部屋で修業したかは明らかでないが、享和年間以前、すでに敦賀においても相撲部屋としての組織が確立されていたことが知られる。

京都相撲と敦賀朝嵐との関係は、いつ頃からか定かでないが、先代仁右衛門に始まり、常右衛門へと受け継がれたのであろう。

その仁右衛門が入門したのが草摺部屋であり、後に帰郷して土俵場を開き後進の育成と、併せて興行をも行なっていたと思われる。敦賀で開いた部屋の居所、組織、所属力士など、その概要については明らかでない。

かけ落ちした二人を、常右衛門と協力して解決に導いた、出石の勇取長蔵であるが、京都相撲の文化十四年七月の番付に、中相撲の上位に勇取長蔵の名が見える。

また、文化文政から天保年間にかけて、興行願いを幾多となく役所に届け出ている。

現役の力士として、また後には出石の頭取として実力のある人だったのであろう。

勇取長蔵が京都相撲で活躍していた時には、草摺一門の所属力士だったか、あるいは、佐右衛門と面識のある間柄だった、と思われる。

文政元年の天神社境内での興行中に起きたかけ落ち事件は、草摺一門の単独興行か、または他部屋との合同巡業であったかは定かでないが、いずれにしても、佐右衛門にも監督責任があったのであろう。

事件の発端から佐右衛門の意向で常右衛門を但馬へ赴くことを指示し、地元の勇取長蔵へも連絡をとり、協力の依頼があったものと考えられる。

そして常右衛門と勇取長蔵によって、かけ落ちした力士も取り押さえられ、遊女も元の置屋に戻し、無事にこの事件も解決した。

この不祥事があっても、敦賀における相撲興行が差し止めされることなく、続けられたことは佐右衛門の尽力が大いにあった。

かけ落ち事件を機に、大頭取草摺佐右衛門から朝嵐常右衛門へ、敦賀一国の頭取免許が授けられ、これまでにも増して確固たる地盤を築くことが出来た。

これらの事から、これまでの恩に報いるために、朝嵐とその一門によって天保三年五月、ここ洲崎の浜に草摺佐右衛門の墓石を建立して、供養したものであろう。

一時期を築いた朝嵐とその一門の、その後の消息は杳として知れず、わずかに明治に入った十五年九月の京都番付東三段目に

江州　朝嵐音吉

の名が見える。江州頭書とあるから近江出身の力士であろうが、この力士が敦賀朝嵐の流れをくむ力士だったかは判然としない。

江戸の繁栄につれて江戸相撲も栄え、上方相撲の主だった力士も次第に江戸相撲へと、参加するようになった。

これと同じくして、京都相撲も徐々に衰退し、明治末頃には自然消滅し、さらには大阪相撲も大正末頃まで続けられたが、昭和二年に東京相撲と合併して、今日の日本相撲協会の前身となった。

このようにして上方相撲は衰退の一途を辿り、各地への支配基盤もくずれていく中で、朝嵐による敦賀地方の興行権や経営など、組織的にも衰えていったであろう。

このような状況の中で朝嵐の名跡が常右衛門で終ったか、また、部屋の存続の年代など今日では詳らかでない。

代って東京相撲が各地に勢力を伸ばしていったが、明治十六年十月に大津出身の京都相撲磯風音治郎一行の巡業が気比宮境内で催されて、大勢の観客で賑わった。

同十七年に東京相撲梅ケ谷一行が、続いて大阪の千田川松五郎一行の巡業が、それぞれ気比宮境内で興行し、同二十一年八月には京都の手柄山幾弥一行が勧進相撲を興行した。

同二十一年九月、東京相撲の大鳴門一行が十五、十六日の二日間、気比宮境内で興行した。

この時の勧進元を務めたのが今井重助である。重助は侠客としても名高く、京都市左京区金戒光明寺塔頭西雲院内にある初代会津小鉄の墓石建立にも尽力したのであろう、彼の名前も刻まれている。

重助は義侠に厚く、よく細民を助け、また消防取締役をも務めて、明治三十四年十月三十日に没した。享年六十一歳。墓石と功績を称える石碑が結城町真願寺境内に建てられている。

この頃の敦賀出身の力士として、明治十五年九月京都番付に、

無鉄砲
鯱ヵ伊之助

の二力士がいる。

無鉄砲は西二段目、鯱ヵは東三段目に見えて、鯱ヵについては詳らかでないが、無鉄砲は名を三輪屋卯之助といい、弥右衛門の次男として境（現栄新町）で生まれた。

どのような成績だったかは不詳であるが、明治十九年二月二日に没した。享年三十一歳の若さだった。

没後、有志によって、栄新町真禅寺に墓碑が建てられたが、その発起人の中に今井重助の名も見えている。

相撲も古来から神事相撲、競技相撲として、それぞれ受け継がれ、とくに競技相撲は多くの愛好者によって支えられて、現在の大相撲発展の基となった。

かの有名な雷電為右衛門も、寛政十二年に敦賀へも巡業に立ち寄ったといわれている。

敦賀においても戦前から敦賀相撲協会があり、他県の相撲協会との交流も盛んに行われていた。

今日では阿曽、利椋八幡神社に奉納される県無形民俗文化財の相撲甚句踊りと、松原町、松原神社例大祭の奉納相撲が、毎年秋に盛大に行われている。

この小稿を草するにあたり、竹森　章、真禅寺各氏から多大なる御教示と御協力を賜わりました。ここに厚く御礼申し上げます。

参考文献

公事根源、日本相撲史、敦賀郡神社誌、敦賀市史（史料篇）、出石町史（出石藩御用部屋日記）、京都滋賀の相撲（まつりと力士の墓）、福井新聞、近江伊香郡志（下巻）